

2017年3月4日（土）～3月5日（日）

国際公開シンポジウム

「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り—あの世とこの世をめぐる儀礼」

Bon, Zhongyuan, and the Seventh Month Celebration in Modern Asia:

Ritual between Other World and This World

要旨集

内容

1. プログラム
2. 要旨（発表順）
3. 趣旨説明
4. 参加者リスト

1. プログラム

3月4日（土）

セッション1 10：20～11：20

座長：河合洋尚

報告者1：横山廣子「お盆、中元、鬼節、百種—東アジアの7月の儀礼」

報告者2：チョイ・チーチョン「鎮魂劇から歌舞台へ—中元普渡の娯楽、パフォーマンス、儀礼」

セッション2 11：30～13：00

座長：塚田誠之

報告者3：川口幸大「孟蘭節と中元節—広東省珠江デルタの事例から」

報告者4：張小軍「『鬼話』と『鬼化』の帝国—中国西南少数民族の『鬼』観念に関する事例考察」

報告者5：韋旻「『迷信撲滅運動』下の南中国における中元節と太平清醮（1930-1949）」

セッション3 14：10～15：40

座長：芹澤知広

報告者6：馬木池「宗教儀礼と社会集団の相互作用—長洲島の水陸孟蘭勝会を事例として」

報告者7：呂永昇「香港における潮洲系華僑の孟蘭盆節の文化遺産申請と文化適応」

報告者8：志賀市子「潮籍孟蘭勝会と潮州人のエスニシティ」

セッション4 16:00～17：30

座長：陳瑤

報告者9：李志賢「離散するコミュニティの中元節—郷村から都市へと移動するシンガポール萬山福德祠」

報告者10：郭根維「生、死と華人の祭日—東南アジアならびに中国における九皇神誕、九皇法会の変遷」

報告者11：伏木香織「シンガポールのハングリー・ゴースト・フェスティバル—儀礼と芸能、それらを支えるコミュニティ—」

3月5日（日）

セッション5 9：30～11：00

座長：郭根維

報告者12：毛迪「百年盛衰—マカオ同善堂中元水陸超幽会の歴史的変遷」

報告者13：鄭莉「金門萬安堂の乩童と中元普渡儀礼」

報告者14：廖小菁・陳瑤「慶仙寿と濟幽冥：マレー半島ペラ地区の何仙姑誕—現代中国広東との比較を兼ねて」

セッション6 11：25～12:30

座長：潘宏立

報告者15：張玉玲「神戸華人による死者供養の儀礼『普渡』と他界観の変容」

報告者 16：芹澤知広「ベトナム華人の中元節における供物・贈与・祭宴」

セッション 7 14：00～15：00

座長：川口幸大

報告者 17：岡田浩樹「『逆さ絵 (Upside down picture)』の死者たち—韓国社会における多様な死者儀礼と死者の複相性について—」

報告者 18：鈴木文子「朝鮮半島の 7 月 15 日—百中における『祖先祭祀』と洗鋤宴 (ホミシ)」

セッション 8 15：15～16：15

座長：志賀市子

報告者 19：湯紹玲「災害記録からみるムラの盆行事—日本の三重県志摩地方の事例から—」

報告者 20：吉田佳世「沖縄本島における旧盆行事からみる個の位置づけとその変化—祖先祭祀制度における嫁の位置づけに着目して—」

総合討論

座長：横山廣子

コメント：末成道男、張小軍、渡邊欣雄

2. 要旨 (発表順)

1. 横山廣子「お盆、中元、鬼節、百種—東アジアの 7 月の儀礼」

東アジアで、ほぼ同時期に同様の死者儀礼が見られる地域は、中国本土を中心として、北から南に朝鮮半島、日本、台湾、香港、ベトナムと華僑・華人居住地域である。この共通性の素地として、中国で生まれた太陽太陰暦、漢訳仏典、道教、儒教などの諸要素がある。それぞれの相互関係を歴史的に考察すると、現状における各地の異同について、マクロな視点からの理解を得ることができる。また、かつて台湾と日本とを比較した鈴木満男は、台湾では、祀る子

孫がおらずに苦海に身を置く亡魂をあまねく救済する「普渡」としての性格が強いのに対し、日本では祖先祭祀としての盆行事が特徴的であると指摘した。

近年の中国と海外の華人社会で行われている儀礼を全体として眺めれば、「中元普渡」あるいは「鬼節」という呼び名が示すように、彷徨える亡魂を広く救い出す（＝済度する）ために行われる行為が目立つ。しかし、他方、中国雲南省大理盆地の少数民族、ペー族が現在まで続けてきた旧暦7月の行事は、亡魂一般の救済の意味合いは薄く、祖先と子孫、あるいは祖先を通して親族関係にある人々の間の絆を深める機会となっている。

2. 蔡志祥「鎮魂劇から歌舞台へ—中元普渡の娯楽、パフォーマンス、儀礼」

P. ファン・デル・ルーンは、中元／盂蘭の鎮魂劇（目蓮劇）は、この儀礼行事に合理性の枠組みを提供すると指摘した。つまり、中元／盂蘭の脈絡において、演劇と儀礼とは不可分に結び付いている。とりわけ、孤魂を救済する鎮魂劇の類の儀礼的演劇においては、その場に参与する者に対して、未知の世界へのヴァーチャルな認識をもたらす。鎮魂劇の模擬的演出は、観衆の心を揺さぶる娯楽であるばかりでなく、参与者をヴァーチャルな救済の場へと導く。しかしながら、まさにこのような靈魂と群衆との交流ゆえに、儀礼的演劇は一方において迷信性を有するとして中国国内では禁止され、同時に海外の華人社会でもエリートの上層社会とは疎遠である。本文では、鎮魂劇から出発し、この1世紀余りの迷信に反対する思潮のなかにおいて、海外の華人社会において、儀礼的演劇と群衆娯楽とはいかに発展し、変化したかを議論したい。さらに、世俗性と宗教性の双方を有する中元・盂蘭時のパフォーマンスを分析して、この行事の核心的要素の理解を試みる。

3. 川口幸大「盂蘭節と中元節—広東省珠江デルタの事例から」

広東省珠江デルタでは旧暦7月のなかばに相次いで二つの儀礼が行われる。一つは、死者、とくに祀ってくれる者のいない「鬼」への施しを主とした盂蘭節である。もう一つは、三元大帝の一人である地官の生日、すなわち中元節に行う儀礼である。一般に盂蘭節は仏教由来の、中元節は道教の節日だとされるが、両者の来歴と今日における儀礼の詳細、そしてそれらについての人々の認識を追ってゆくと、制度宗教の枠では捉えきれない中国における信仰世界の一端が明らかになる。それはまた、宗教人類学への理論的な貢献の可能性を開くことにつながるかもしれない。

4. 張小軍「『鬼話』と『鬼化』の帝国—中国西南少数民族の『鬼』観念に関する事例考察」

中国の西南部の少数民族のなかには、彼らなりの「鬼」（悪霊、さまよえる精霊）ならびにそれに伴う中元節が見られ、漢族国家の文化的影響が見られる。実際のところ、彼らの悪霊に対する理解は、彼らがもともと持っていたアニミズム的な一元的文化、ならびに比較的後期の漢文化における「鬼」と神の二元論的構造に根ざしている。本文では個別事例を通して、彼らの「鬼」に関する柔軟な理解を解き明かし、かれらが二種類の「鬼」文化の融合のなかに、どのように文化的ロジックを有しているかを考察する。

5・韋旻「『迷信撲滅運動』下の南中国における中元節と太平清醮（1930-1949）」

本文は、第二次世界大戦後の広東省中山県の住民が、中華民国政府の反迷信運動の下に、太平清醮と中元節に対してどのような見方を有していたかを考察する。1930年代から中華民国国民党政府は、民間宗教は中国の近代化の障害であり、さらに宗教儀礼は経済的浪費だとみなした。当局政府は、町や村で民間宗教儀礼を行なうことを一切、禁じた。小さなものは鬼節（中元節）の灯籠流しから、紙銭を燃やす行為、菓子類、大きいところでは、僧侶が集まって行なう醮の儀礼などである。中山県住民のこの政策に対する考え方は、第二次世界大戦後になってようやく明らかになった。住民のうちの一部は、艱難辛苦の日々を過ごした後、灯籠流しや菓子類を食べることは、心理的ストレスを緩和する娯楽活動と考えた。また他の住民たちは、簡単な済度儀礼は死んだ者への哀悼を表すものととらえた。彼らはこれらの活動を国家の進歩の障害や資源の浪費とは考えず、この宗教儀礼に対する合理化により、醮儀礼や中元節を新中国樹立後の政府による禁止まで保持したのである。

6. 馬木池「宗教儀礼と社会集団の相互作用—長洲島の水陸孟蘭勝会を事例として」

宗教は一種の展覧方式であり、展示する意義は、儀式を支配する集団の内部権力の変化とともに、異なる演繹や解釈が生まれる。本文は、長洲の「水陸孟蘭勝会」の考察を通して、どのように展示内部に異なる作業方式が存在し、方言の異なる長洲漁民集団の構造がみられるのかなど、この一年に一度の海上祭幽儀礼の歴史的発展の説明を試みる。この本来は「曬家艇（漁獲物の干物を売っていた漁民たち）」がおこなっていたローカルな宗教儀礼は、第二次世界大戦後、いかにして次第に「罟仔艇（沿岸囲い網漁業を営む漁民）」の手中におさめられるようになったのか？さらに戦後の漁民組織の設立、漁民新村の建設、漁民らのオカあがり（海上から陸への移動）、地方自治権力を獲得するプロセス、長洲漁民集団の内部構造に重大な変動が

生じる事態の下、元来の海上祭幽儀礼の演繹と解釈にどのような変化が生まれるかを考察する。

7. 呂永昇「香港における潮洲系華僑の孟蘭盆節の文化遺産申請と文化適応」

毎年の旧暦7月の孟蘭勝会は、中国民間における重要な祭日である。特に香港では孟蘭勝会の活動は宗教、社交さらに集団のアイデンティティの確立などの機能を有している。済度祈願を表現し、慎終追遠する儀礼行為以外にも、孟蘭勝会はすでに香港の歴史文化と民俗伝統の具体的縮図となっている。孟蘭勝会が重要な祭礼となったこと、なかんずくその原因は、香港に特徴的な地方文化と社会の発展プロセスと密接に関連している。香港は開港以来、開かれた移民社会であった。異なる省や方言の集団が、異なるローカルな民俗文化をもって、香港の土地に定着・発展して、社会を形成し、異なるアイデンティティを構築してきた。この文化的経験は集団の日常生活と歴史的脈絡と緊密に結びついている。本文は、潮僑孟蘭勝会の成立、発展と文化遺産申請のプロセスを通して、香港の早期住民の生活経験、出身地のアイデンティティの継続、社会文化機構の創新の変遷過程を論じてみたい。

8. 志賀市子「潮籍孟蘭勝会と潮州人のエスニシティ」

毎年旧暦七月になると、香港では街坊（町内会）、公共団地の自治会、公司、社団、宗教団体など、さまざまなコミュニティが孟蘭勝会を実施し、その数は百か所以上に上る。そのうち、中国広東省東部の潮汕地域をルーツとする「潮州人」コミュニティが主催するいわゆる「潮籍孟蘭勝会」は約半数を占め、その規模といい、派手さといい、ひときわ目立つ存在である。香港の潮籍孟蘭勝会は、郷里の伝統を継承しつつも、香港という、異なる文化背景を持った華人のサブエスニックグループがひしめきあって暮らす超過密な都市空間のなかで独自の発展を遂げ、また香港における「潮州人」エスニシティの形成にも少なからぬ作用を果たしてきた。本発表では、香港の潮籍孟蘭勝会について、その歴史的展開、儀礼及びエスニシティとの関連を論じるとともに、2010年以降中国の国家級非物質文化遺産に認定されてからの新しい動向についても触れることにしたい。

9. 李志賢「離散するコミュニティの中元節—郷村から都市へと移動するシンガポール萬山福德祠」

シンガポールは第二次世界大戦以降、農村が都市化計画によって次第に姿をけし、現在ではすでに農村が存在しない状況となっている。元来、農村の宗教やコミュニティの中心であった寺廟の多くも農村の消失とともに取り壊され、移設されている。萬山福德祠はカールン・ゲイラン地区の沙岡村にあり、150年の歴史を有する。1960年代から70年代の都市新設と工業化の発展を経て、政府は1979年に沙岡村の土地を接收し、村民を付近の新開発した政府建設住宅区（公共住宅区）へと移住させた。萬山福德祠は旧来の土地に留まり、政府との間で30年間の土地賃貸契約を結んだ。本文は、筆者が2015年から2016年におこなった萬山福德祠の中元節の観察、その他の文献資料ならびに新聞報道、都市発展政策などを通して、農村がなくなり、村民が減少した状況が廟と祭日にもたらした影響を考察する。

10. 郭根維「生、死と華人の祭日—東南アジアならびに中国における九皇神誕、九皇法会の変遷」

祖先を哀悼することから、神々を祭祀し、彷徨える霊を安撫することまで、華人の伝統的な祝祭の大半は生、死と異なる境界間の相互作用をめぐるものである。清明節、中元節、寒衣節はいずれも主として死にかかわる祭日である。そのなかで中元節は、シンガポールと海外華人地域で最もにぎやかな旧暦の祭日の一つと言える。中元節が過ぎれば、シンガポール、マレーシア地区で誰もがよく知る九皇誕である。九皇誕は、一般の神々の祭礼よりもにぎやかである。その由来の解釈や慶祝方法は大いに異なるが、現在の儀式の大部分は全て斗母星君と南北斗星君との関わりを含むかあるいはめぐるものであり、生死延寿と密接な関係を有する。そこで、九皇誕と7月中元節は華人の旧暦の祭日においていかなる関係にあるかを追求してみたい。本文は、この生死延寿の角度からシンガポール・マレーシアで盛んな九皇誕と中国・香港・台湾で行なわれる九皇法会を論じる。東南アジアの九皇誕は、九皇法会とも称されるが、齋戒を強調し、大部分の儀礼行為は拝斗の儀式である。双方の地域（両地域の各地についても）の儀式規模と方式、九皇大帝の由来に対する考え方には大きな違いがある。しかしながら南北斗星君と斗母は、いずれこでもこの祭日においては非常に重要な役割を担う。九皇法会と

九皇誕は重陽説とまたどのような関係にあるのだろうか？生死の角度から、九皇誕と中元節をその他の華人の旧暦の重要な祭日と同様の研究の枠組みにおき、さらにこの独特な祭日を深く理解することができるのではないか。

11. 伏木香織「シンガポールのハングリー・ゴースト・フェスティバル—儀礼と芸能、それらを支えるコミュニティ—」

シンガポールの陰暦7月の儀礼とその際に行われる芸能について、それらが現在、どのようなおこなれているのか、それらを支えるコミュニティがどのようなものであり、どのような変遷を経て現在に至っているのかについて報告する。名称も様々な儀礼は、祖先祭祀、無縁死者の供養、その他の儀礼がそれぞれのコミュニティの秩序によって、ひとつの儀礼として構成されて実施される。儀礼に付随する芸能も、かつては各方言集団によって異なる種類の戯劇が街戯として行われていたことが知られるが、現在はかなり衰退し、その上演形態が大きく変わって来ている。また一方で、それに変わるものとして登場した歌台が大規模に展開するようになった。こうした儀礼と儀礼を支えるコミュニティも、ひとりの人間がいくつもの団体の儀礼に参加するような、緩やかな繋がりを持ったものとして成立している。本発表は、こうした実態を、いくつかの実例をもとに分析し、明らかにする。

12. 毛迪「百年盛衰—マカオ同善堂中元水陸超幽会の歴史的変遷」

1940年9月、日本とポルトガルは「日葡マカオ協定」を調印し、マカオの中立を宣言した。マカオはそれにより、日本軍の占領を免れることになった。それにもよらず、1941年の太平洋戦争勃発後、中国大陸と香港の難民が大量にマカオに流入した。戦時中の物資の欠乏、災害や疾病の頻発により、マカオ難民の死亡者数は瞬く間に増加した。他方、日本軍の封鎖解除後、元来、故郷において死者の葬礼を行っていたマカオ在住中国人の一部は、葬礼と祭祀活動で大きな影響を被った。この二つの変化は、マカオの旧暦7月の死者への宗教・祭礼活動に大きな打撃を与えた。そこで、本文は戦争環境がマカオの7月の行事に与えた影響と変化、ならびにそれがマカオの華人社会の変化に極めて大きく反映していることについて考察したい。戦争中の7月の儀礼については、それに関わる制度規則、組織構造、組織成員、儀礼とその次第、活動地域の範囲、参加集団などを考察する。

13. 鄭莉「金門萬安堂の乩童と中元普渡儀礼」

華南沿海部の中元普渡儀礼は、通例、すべて現地の乩童（宗教的職能者）によって執り行われる。本文は、金門萬安堂を霊として、乩童の伝統と普渡儀礼との関係の考察を試みる。金門沙美萬安堂は、合計 12 対の乩手を有し、すでに三冊の乩示文献ならびに関連文献を刊行している。本文は萬安堂の乩文集を基礎として、フィールドワークを加えて、萬安堂の乩童が中元普渡において演じる役割、さらに道士との間の関係を考察し、コミュニティ内の種々の儀礼伝統との相互関係を論じたい。

14. 廖小菁・陳瑤「慶仙寿と濟幽冥：マレー半島ペラ地区の何仙姑誕—現代中国広東との比較を兼ねて」

19 世紀の半ば以降、中国南部からマレー半島のペラ地区に錫鉱山採掘事業に従事する広東移民が到来した。故郷の女神「何仙姑」信仰が錫を盛んに生産するラルツとキンタ川流域に流入した。19 世紀から 20 世紀に入る時期、上述地区の錫鉱山開発の繁栄に呼応した地域の文化景観は、多くの錫鉱業で繁栄する華人社会で何仙姑信仰が起こり、廟信仰の伝統が確立され、その後の故郷での実践と異なるローカルな演繹の発端となった。本文はマレーシア・ペラ州キンタ県トゥロノ地区の 10 年に 1 度おこなわれる何仙姑生誕儀礼の「大醮」伝統を主として考察し、同時に中国広東の故郷とペラ州の他の地区の何仙姑生誕儀礼の実践と比較する。それにより、この中元から中秋の期間に実施される神誕儀礼の伝統が、実にトゥロノの広東系僑民を主とする華人コミュニティにとって、地域の核心的権威機構である何仙姑廟を中心として行われる、毎年浄化とコミュニティの統合との文化パフォーマンスであることを説明したい。つまり、「何大仙姑」の生誕日を神も人も一緒に祝い楽しむ雰囲気の中、生誕儀礼の儀式活動のほかに、一般の華人社会で旧暦 7 月によく行われる死者を悼む供養の役割が付与され、同時に、多元的な宗教的ディスコース、地方文化、そしてエスニック・グループの歴史記憶が、移民社会において相互に連絡し、作用する歴史過程を象徴的に提示するのである。

15. 張玉玲「神戸華人による死者供養の儀礼『普渡』と他界観の変容」

在日華人コミュニティのサブ集団の一つ、福清出身華人によって旧暦の 7 月中旬に祖先や無縁仏の供養を目的とする普度の儀礼は、彼らが代々受け継いできた故郷の出身地文化の一つである。しかし在日華人による普度は、故郷で行われてきたそれとすでに意味合いが異なり、また同じ福清出身者による普度でも、神戸と長崎と京都ではそれぞれ開催日も内容も異なってい

る。「異郷」に暮らす華人にとって、普度は何を意味するのか。華人の他界観はどう変容したのか？本報告は、神戸で伝承されてきた普度に焦点をあてて、福清出身者華人の日本での移住・定住及び同郷者ネットワークと彼らの故郷との関わりに関連付けながら、普度の歴史的変容および現状について整理し、かつ今日的意義について検討する。

16. 芹澤知広「ベトナム華人の中元節における供物・贈与・祭宴」

香港や海外華人の「中元節」＝「盂蘭節」は、英語で「Hungry Ghost Festival」と訳されてきた。「Hungry Ghost」は、供養する子孫のいない餓鬼であり、その餓鬼に供養する（食べ物を与える）宗教的な儀礼が行事のなかでは重要である。いっぽう、行事の一般参加者（観察している人類学者も含む）にとっては、目に見えるかたちで行事のために用意されている供物（燃やされる紙製祭祀用品、供物としての食品など）、贈与の品（貧者へ配られる米など）、そして、「Festival」の中心をなす宴席「Feast」がきわめて重要である。

ベトナム華人の集住地区であるホーチミン市チョロン地区の華人の寺廟で行われる中元節は、例えば潮州人の法師や宗教結社を招いて専門的な儀礼を行う義安会館の場合など、比較的大規模で多くの要素を含んでいる。いっぽう華人が先住民族のクメール人と共住したり、同化したりしているメコンデルタ地域では、例えばチャビン省チャウタン県の関帝廟のように、供物＝祭宴料理＝家庭料理というかたちで、コミュニティの共食という、祭礼のもっとも基本的な部分が大きな要素を占める。

17. 岡田浩樹「『逆さ絵 (Upside down picture)』の死者たち－韓国社会における多様な死者儀礼と死者の複相性について－」

本発表では、韓国社会において同一の死者に対し複数の宗教において儀礼が行われる現象に着目し、これを「逆さ絵の死者」としてとらえ、これが成立する歴史的、社会的、文化的コンテクストを検討しようとする。韓国社会の複層的な宗教のあり方については、「シンクレティズム」「朝鮮社会の二重構造」「宗教のせめぎ合い」などといったモデルからの説明があり、またそれぞれの宗教においての祖先霊についての民族誌的資料が蓄積されてきた。しかし同一の死者霊が、相互に関連づけられることがなく、儒教式の祖先儀礼の対象、仏教の死者供養の対象、かつ巫俗儀礼に招魂される霊となる場合がある。これ死者霊が、はあたかも一枚の顔の絵でありながら、見る角度によって違う死者の「顔」を見ることができる「逆さ絵」（だまし

絵)のような複相性を備えている。この死者霊の複相性に着目し、東アジア地域における七月の死者儀礼との比較検討しうるアプローチを考えたい。

18. 鈴木文子「朝鮮半島の7月15日—百中における『祖先祭祀』と洗鋤宴（ホミシ）」

現在、韓国において祖先祭祀を行う代表的名節（節句）は、旧正月と秋夕（旧8月15日）であり、儒教式の祭祀や墓参がおこなわれ、国民の大移動が起こるのもこの両日である。一方、7月15日は、寺院においては、仏教信徒や僧侶たちによって盂蘭盆会が盛大におこなわれるが、村落社会では、無形文化財以外には、ほとんどその姿は見られなくなった。1970年代ごろまで活発であったという「百中（ペクチュン）」は、「洗鋤宴」、「モスナル（作男の日）」などの別称に象徴されるように、農閑期のノリ（祭事）や農耕の予祝儀礼的要素の儀礼がむしろ中心であった。しかし、「望魂日」などとも呼ばれ、祖先祭祀的要素もあり、他地域との相違は、李朝時代の仏教排斥のみが要因ではなく、農耕暦や経済的変容も関連しているように思われる。本発表では、古典的な歳時記と1980年頃までの民俗調査報告書等から、村落における「百中」の動態を概観する。

19. 湯紹玲「災害記録からみるムラの盆行事—日本の三重県志摩地方の事例から—」

盆行事は日本民族学の基本的なテーマとして研究されてきた。柳田國男の『先祖の話』をはじめ、先行研究ではイエを主体とした盆行事に限定されている。イエの先祖祭祀に収斂できない無縁仏供養については、主体が明確されず、儀礼の多様性、地域性から論じられることが多い。

筆者は日本滋賀県、福井県、三重県で7年間のフィールドワークと文献調査をおこない、無縁仏供養がムラによっておこなわれるものが多いと確認できた。本研究では、イエの盆行事研究を参考しながら、ムラを主体といった盆行事研究を深める。調査地は日本三重県志摩地方とする。志摩地方では、太平洋海岸に面し、台風、地震、津波、船難事故が多発し、江戸時代に人員、財物の被害状況を明確に記載した文献資料や津波記念碑（遭難者供養塔）が数多く残されている。それらの資料はムラの盆行事（無縁仏の供養）と災難の関連性を語っており、ムラの盆行事の歴史変遷を解明するために利用できる。ムラの盆行事の歴史変遷を解明することによって、イエの盆行事との相互関係から盆行事の性格を論じる。

20. 吉田佳世「沖縄本島における旧盆行事からみる個の位置づけとその変化—祖先祭祀制度における嫁の位置づけに着目して」

本発表では沖縄本島北部X区の事例をもとに、沖縄の盆行事について特に「個人」の位置づけとその変化という点から考察しようとするものである。盆行事は沖縄では「旧盆」と称されているように旧暦の7月13日から7月15日に行われ、最も重要な祖先祭祀のひとつであると考えられている。沖縄の盆行事は、基本的には家（ヤー）で祀られている祖先を祀るという意味で、家を単位とする行事である。しかし、父系を通じて上位世代から下位世代へと伝達されると観念されている遺伝物質“シジ”の観念を背景に、祖先祭祀がヤーの範囲では捉えきれない個人を単位として父系的に上位世代を遡るように維持されている側面があることも指摘されてきた。本発表では沖縄の旧盆行事の特に嫁（ユミ）の立場にある女性たちの近年の動向に着目し、現代的变化を個の捉え方という点から考察してみたい。

3. 趣旨説明

東アジア地域に広く見られる7月の死者儀礼は、日本では現在も全国的に行われており、最も身近な毎年の行事の一つである。アジア地域に広がる同様の儀礼を見渡すと、起源やその内容に関して軌を一にし、類似する側面もあるが、各地で独自の展開もある。

この時期は「中元」といった暦の上での位置づけと同時に、台風や洪水、猛暑などによる災害や病気が発生しやすい、人びとが乗り越えねばならない危機を伴う時節ともいえる。この時期に各地で行われてきた活動には、祖先祭祀や無縁の死者の供養といった宗教儀礼以外に、盆踊りやさまざまな芸能活動としての展開など、多様な内容が見られる。

本シンポジウムは、この7月の儀礼をアジア地域の広範な視野において比較検討し、それぞれを位置づけ、その歴史、当該社会とかがかわる展開の状況、現在までそれが継続されている意味などについて、新たな理解を得ることを目的とする。多数の研究成果の交流を通して学術的発展に貢献するとともに、公開形式でシンポジウムを催し、アジアにおいて、自文化、他文化双方に対する人びとの理解を促進することをも目指している。

4. 参加者リスト

<国内>

(館内)

河合洋尚 国立民族学博物館・准教授

チヨイ・チーチョン (蔡志祥) 国立民族学博物館・外国人研究員／香港中文大学・歴史系・教授

塚田誠之 国立民族学博物館・教授

横山廣子 国立民族学博物館・教授

(館外)

岡田浩樹 神戸大学大学院国際文化学研究科・教授

川口幸大 東北大学大学院・文学研究科・准教授

志賀市子 茨城キリスト教大学・文学部・教授

末成道男 東京大学・名誉教授

鈴木文子 佛教大学・歴史学部・教授

芹澤知広 奈良大学・社会学部・教授

張玉玲 山口県立大学・国際文化学部・准教授

潘宏立 京都文教大学・総合社会学部・教授

伏木香織 大正大学・文学部・准教授

吉田佳世 神戸大学・日本学術振興会特別研究員

渡邊欣雄 国学院大学・教授

<国外>

陳瑤 廈門大学・助理教授 廈門 (中国福建省廈門市)

郭根維 南洋理工大学・助理教授 (シンガポール)

李志賢 香港中文大学・歴史系・大学院博士課程・院生 (香港)

廖小菁 台湾中央研究院・歴史語言研究所・博士后研究員 (台湾)

呂永昇 香港中文大学・歴史系・助理講師 (香港)

馬木池 香港中文大学・講師 (香港)

毛迪 香港中文大学・歴史系・大学院博士課程・院生（香港）

湯紹玲 広西民族博物館・専任研究員（中国南寧市）

章旻 香港中文大学・歴史系・博士后研究員（香港）

張小軍 清華大学・教授（中国北京市）

鄭莉 厦門大学・助理教授 厦門（中国福建省厦門市）